

仮名交り單句編

大窪實
三吉艾
編

全

特34

942

077450-000-3

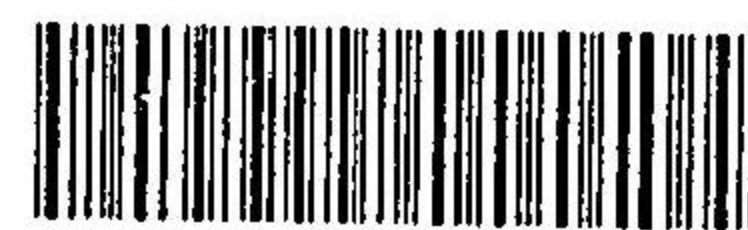
特34-942

仮名交り單句篇

三吉艾/編

M17.8

DAC-0743



大庭實閑
三吉八編

全一冊

頂石文單言編

書林 福井瀧糸野藏版

假名
交り單言篇

第一

机ふむらひ。本を讀む。○筆
をとちて。手習む。○硯ふて
墨をする。○算盤にてもの
を數ふ。○黒き羽織をきる。
○白き足袋をまく。○鶴子

頸も長し。○雁乃足も短し。
 ○鳥も鳩より大あり。○兎も狐より小し。○雀も朝軒になく。○犬も夜門をまもる。○頭に帽をかむる。○手に杖を携ふ。○人を乗せて走る馬あり。○車をひきよて

歩む牛あり。

第二

朝日乃方を東とし。夕日乃方を西とし。磁石も北と南をさし。○櫻も春に花をまき。菊の花も秋開く。○夏も單衣。帷子を著。冬も袷綿

入を着る。○東西南北を。四方といひ。春夏秋冬を。四時といふ。○目なけきを。見る能まび。○耳あるゆゑ。聞くことを得る。○鼻を。香を嗅ぎ。口を。食を味ふ。○皮膚にふきて。物の剛柔を知る。○

耳。目。口。鼻に。皮膚を合せて。五官といふ。

第三

汝の着物ハ。絹なるや。○我れ袴も。木綿なり。○絹ハ。柔にして。ろろく。木綿も。厚くして。つと。○彼の上衣も。毛織にして。

て。木の羽織も。麻布あり。○毛織も。最暖にして。麻布ハ。最涼し。○葡萄も。たなをかけて作り。其實も。秋に至りて熟す。○蓮根ハ。沼田に作り。冬の日。小之をちる。○柿も。甘く。蜜柑も酸く。薑も辛く。慈姑も苦き。阿

り。○果物ハ。熟したる小阿らざれも。食ふべからば。○野菜も。煮ゆるをまちて食ふべし。

第四

草木も。生命阿まじども。歩行をすることを得ば。○鳥獸も。歩行すまじども。語ること能まば。○

人を能く歩行し。能く語り。又。
 能く物を考ふ。○物の多少を
 はかるに。を。升を用ひ。長短を
 もるるに。を。尺を用ふ。○天秤
 ハ。輕重を計るに。用ふるもの
 あり。○土地の高低ハ。水の流
 を見て知るべし。○木の良否

を。花の容を以て。知るべし。ら
 せ。○北の方に。紙鳶の昇り多
 るとき。を。風を。何きの方より。
 吹くと知るや。○家の影。西の
 方にうつると。きた。月を。何き
 の方。小阿りと思ふや。

第五

家にありても。父母の命に従ひ。
 學校ふ於ても。教師の教を守る
 盡し。○兄ハ。店よ在りて。職業を
 勵之。弟も學校ふ出で、學問を
 勉む。○姉も。割烹の道にくはし
 く。妹も。裁縫の道に長む。○惡
 き友に交るな。かき無益のものも

を弄ぶな。かき。○飲食をつ、
 み。運動を怠らざるも。健康の
 となり。○人の惡きことをいへ
 ず。我の善きことをいふものな
 し。○知らざることを。速に問ふ
 盡し。知まざることも。かく盡さ
 らば。○人を欺くも。物をぬすむ

に同一。戯にも。虚言をなすこと
なから。

假名單句篇終



明治十七年三月廿六日板権免許

全壹冊

明治十七年八月十六日出版發兌

定價三錢五厘

閱者

石川縣士族

大窪

實

編者

上京區第廿四組福屋町六番五寄留
山口縣士族

三吉

艾

出版人

上京區第廿二組錦砂町十五番戸寄留
京都府平民

福井源次郎

下京區第六組三條通寺町東入石橋町三番
京都府平民

賣弘

福井孝太郎

上京區第三十組寺町茶土香寺前町五番



